



TITLE:

公娼の前借金に就て

AUTHOR(S):

岡崎, 文規

CITATION:

岡崎, 文規. 公娼の前借金に就て. 經濟論叢 1923, 17(1): 94-105

ISSUE DATE:

1923-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128043>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第七十卷 第一號

大正二十二年七月一日發行

論叢

賣上税の缺點・・・・・・・・・・法學博士 神戸 正雄
私經營統計概論・・・・・・・・・・法學博士 財部 靜治
文化的認識と歴史的認識・・・・・・・・法學士 恒藤 恭

時論

農村問題と其の救済策・・・・・・・・法學博士 河田 嗣郎

說苑

『諸國民の富』のダブリン版に就て・・法學博士 河上 肇
歴史派經濟學發達の徑路・・・・・・・・法學士 山口 正太郎
公娼の前借金に就て・・・・・・・・・・經濟學士 岡崎 文規
中世末期に於ける村落の結合を論ず・・・・牧野信之助

雜錄

米國の新關税法に就て・・・・・・・・法學士 高橋 康順
新マルサス主義英語通俗書解題・・理學士 山本 宣治
アダム・スミス生誕二百年記念會記事・・・・委 員

公娼の前借金に就て

岡 崎 文 規

一

凡そ何れの時代、何れの場所たるを問はず、多少とも文化の芽ざしさへある所には、影の形に従ふ如く、必ず女子の賣淫が行はれてゐるのであるが、賣淫制度は可弱い赤貧の婦女子達を金の鎖で繋ぐ立派な奴隸制度である。Willis は之を White Slave と言つたが、洵に適切な言葉だと思はれる。また巢林子は之を「人買同然の所業」と言つてゐるが、法律が公認してゐる人身買賣そのものでなくて何であらう。外國に於ても、曾ては國家がこの賣淫制度を保護し、教會自らがその經營を行つたと言ふ實に驚歎すべき史實が傳はつてゐる許りでなく、Prostitute の聖壇に禮拜する事に就いては大いに反對を主唱した St. Augustin でさへも之をして社會に必要な制度として認めしめたと言ふ事は性的社會的惡が如何に絶大なる威力を有つてゐたかを視はしむるに足る。我國の賣淫制度は現今に於ても大いに優勢である。實例を最近の統計に就て見れば、大正八年に於ける公娼數は四九、八二一、藝妓數五二、四六六、合計一〇二、二七八であつて、(藝妓は法律制度的上から言へば必らずしも賣淫行為を公認されてゐるものではないが、自前藝妓を除けば藝妓も亦前借金によつて身を沈め、また事實上公娼と同一の行為を強制せられてゐることは周知の事實である。)同年に於ける女學生數(高等女學校及び實科高等女學校)一三一、七二一に對して、約八割に達してゐると言ふ數字に依つても、略

1) Seligman, The Social Evil P. 2.

2) Willis, The White Slaves of London. The White Slave Market.

3) 傾城酒類童子

4) Bebel, Die Frau und der Sozialismus. S. 72.

5) Sanger, History of Prostitution., P. 91 Bebel, ibd. S. 177.

6) 第四十回日本帝國々勢一斑 7) 第四十一回日本帝國統計年鑑

は之を看取する事が出来るであらう。更に同年に於ける遊興費總額が九三、一九八、四五圓⁸⁾と言ふ巨額に達してゐる事實は斯くの如き賣淫制度が社會的的需要に向つて、如何に重要な生命を有つてゐるかを知らる事が出来る。

この賣淫制度を倫理上如何に見る可きか、或は社會政策上如何に處理す可きかは元より重大なる問題である。が、私はこゝではこの方面の問題には一切觸れない積りである。本研究の目的は専ら公娼の前借金を統計的に觀察するに在る。

二

公娼の前借金には之に二つの異なつた觀點が與へられてゐる。其の一は下層金融としてであり、他はある意味に於ける商品價額としてである。それは他の一切の商品が市場に於て、需給關係に支配されてゐると同一の現象を示すものであると言ふこと以外に、彼女達は白⁹⁾首と言ふよりも正に白奴隷であるからである。日本銀行兌換券發行高の季節的變動に就ては既に汐見學士の研究がある。そこで私は下層金融の一つである公娼の前借金にも季節的變動ありや否やを研究し、次にある意味に於ける商品價格としての公娼の前借金と一般物價との關係を究明し、尙ほ之に加へて、新公娼と再度或は鞍替公娼との前借金高の比較を試みたいのである。乍併、斯くの如き研究に役立つ統計的材料は從來は、一つもなかつた。そこで私は京都市松原署に於て、娼妓名簿登錄申請簿に就いて、松原署管内の公娼の前借金を調査したのである。調査材料を松原署管内の公娼に求めたのは、調査に便利が多かつた爲めと、一つには之を京都に於ける代表的地域のものだ

8) 第四十一回日本帝國統計年鑑

9) Flexner, Prostitution in Europe. P. 14

10) 經濟論叢、第十五卷第五號

と考へられたからである。期間は明治四十五年一月一日より大正十年十二月三十一日に至る滿九ヶ年間である。期間は調査し得られる最も古き時期から最近までを取つたのであつて、調査中には未だ大正十一年度の材料は整備してゐなかつたのである。調査件数は總計三、七二三、前借金總額は二、八五〇、三七五圓である。これを年次別に示したものが左の第一表である。

第一表 總前借件數及び總前借金額

前借/年次	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年	大正七年	大正八年	大正九年	大正十年	合 計
前借件數	五九三	三二二	三三三	三三〇	三九六	三七一	四四〇	四四三	五八八	三、七二三
前借金額	一三、四七五	一三、六八八	一五〇、四八一	一六六、四四九	一六六、四四九	二五八、八〇九	三六六、四四〇	四六六、一〇〇	八〇〇、八二〇	二、八五〇、三七五

(1) 公娼の前借金の季節的變動

公娼前借金に季節的變動ありや否やを研究するに當つて、先づ問題となるはその期間を如何に區分す可きかである。私は最も便宜であつて、最も適當であると思はれる月別を之に採用する事にした。その理由は汐見學士の研究に於けると同様、問題の中心が季節的變動にあつて、一ヶ年間に於ける下層金融の緩急狀態を調査するを以て目的としてゐるからである。

私は之を研究するに當つて、其の前借件數の季節的變動をも併せて調査する必要があると思ふ。前借金を必要とする員數が月に依つて如何に分布されてゐるかを觀察しなければならぬからである。前借金を必要とする員數と金額とは必らずしも同一の比例を保つものではなく、しかもそ

はその季節的變動の有無を視はしむる一つの方法であるからである。

左の第二表は月別前借件數統計である。

第二表 月別前借件數

年次	月次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	合計
大正二年	△	三	二	四	四	三	三	六	三	三	三	三	三	三九
大正三年	△	四	三	六	元	三	元	三	△	三	三	三	三	三九
大正四年	△	五	一	六	三	三	六	七	元	元	六	三	三	三二
大正五年	△	四	七	四	四	七	元	二	三	元	四	三	三	三三
大正六年	△	六	七	七	四	三	六	三	元	三	六	三	三	三三
大正七年	△	三	三	四	七	四	八	三	六	八	三	四	三	三三
大正八年	△	三	二	六	三	三	四	元	元	三	四	三	三	三三
大正九年	△	八	七	三	四	二	二	元	元	四	三	三	三	三三
大正十年	△	三	四	六	四	三	四	六	元	元	三	三	三	三三
合計	△	四	二	三	三	二	二	三	三	三	三	三	三	三三
平均	△	六	七	三	四	三	三	三	三	三	三	三	三	三三

備考 △ハ最低 ○ハ最高

大正二年より大正十年に至る九ヶ年間に於ける月別前借件數の最低は、大正二年の八月に於ける二十二件、大正七年の九月に於ける八件と言ふ例外はあるけれども、其の他は何れも一月に於て最低數を示してゐる。九ヶ年間の平均に就いて見るも一月は最低である。それから毎月少しづゝ増加して、四月には多少の兀突をなし、七八月ごろが谷で、また次第に増加し、十二月が急に

高く、各年に亘つて例外なく前借件数の最高を示してゐる月は十二月である。言はゞ谷、山、谷、山の二つの波を描いてゐることとなる。

各年に亘つて斯くの如き供給状態が何故に繰り返されつゝるかの理由を問ねる前に、その需要は果して如何なる状態にあるかを調査する必要がある。公娼の供給が需要を刺激し、且つ増加せしむる¹¹⁾と言ふ事も有り得る事であらうが、普通、需要が定まつて供給が之に應ずるものであるからである。それで私は京都府廳保安課に於て、松原署管内遊客費金高月報に就て、公娼の花代を調査したのである。大正九年、十年、十一年の三ヶ年分しか利用し得なかつたのは呉れなくも遺憾であるが、大體の傾向を知るには之れで何等の不都合をも感じない。左の第三表は公娼の月別花代の統計である。

第三表月別花代

單位圓

年次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	合計
大正九年	二七、三六五	一八、九六六	三六、六六七	三〇、〇〇九	三〇、一〇九	一五、一八三	一五、八二一	一五、〇九二	一四、一三三	一五、一八三	一五、一八三	一五、一八三	一五、一八三
大正十年	二四、九七〇	二〇、七五七	二〇、〇〇九	二〇、〇〇九	二〇、〇〇九	二〇、〇〇九	二〇、〇〇九	二〇、〇〇九	二〇、〇〇九	二〇、〇〇九	二〇、〇〇九	二〇、〇〇九	二〇、〇〇九
大正十一年	二二、三六五	二二、三六五	二二、三六五	二二、三六五	二二、三六五	二二、三六五	二二、三六五	二二、三六五	二二、三六五	二二、三六五	二二、三六五	二二、三六五	二二、三六五
合計	七四、七〇〇	六〇、〇九二	八〇、〇〇九	七〇、〇〇九	七〇、〇〇九	五〇、〇〇九	五〇、〇〇九	五〇、〇〇九	五〇、〇〇九	五〇、〇〇九	五〇、〇〇九	五〇、〇〇九	五〇、〇〇九

右の表に就いて公娼の花代を月別に觀察すると、一月が各年を通じて例外なく最高額を示し、次に四月が高い。之と反對に八月は各年を通じて例外なく最低額であつて、こゝにも一つの季節

11) Flexner, Prostitution in Europe, P.62.

的變動のある事を發見するのである。一月が其の需要が最高位にある事に就いては説明を要しないほど自明である。一月に次いで四月が需要高の多いのは花見ごきに、粹も不粹も浮れ心の萌え上る爲めであらう。七八月が最も需要に乏しいのは、夏の餅は犬も喰はないと言ふあたりの消息を語つてゐるものではなからうか。今假りに大膽なる推測¹²⁾が許されるならば、一年を通じて出産率は五六月に最低位にあり、婚姻率はそれが七八月である事を思ひ合す事が出来るのである。そこで再び公娼前借件數の季節的變動の問題に立ち歸るのであるが、四月の山と八月の谷とはそれ／＼花代の四月の山と八月の谷とに對應してゐる事が知られる。公娼前借件數の十二月に於ける異常なる山は、正に其の翌年の一月に於ける花代の山に適應するものであつて、抱主側が新春の準備に要する大なる需要増加によるは言ふ迄もないが、今一つには越すに越されぬ年の瀬に、金策に窮して鬼となる親達が少ないから居ること、換言すれば公娼供給者の激増にも原因してゐると見る事が出来る。十二月は公娼の需要、供給共に激増するのであつて貧乏人の娘に取つては鬼月である。一月は前借件數の低いのは、抱主側では既に年末に必要に應じて十分に抱へ込んでゐる爲めに、差しあたつての需要が少なく、前借者側に就いて言へば、新年早々はさうした金銭上の苦策も必要が稀なために、公娼の供給も自然と少ないのであらう。

次に私は公娼前借金の季節的變動を調査したのである。左の第四表がそれである。

12) Rümelin, Bevölkerungslehre (Schönbergs Handbuch d. P. Ö.) S. 902及び S. 901

Mayo-Smith, Statistics and Sociology. P. 75. 及び P. 97
大正八年日本帝國人口動態統計第十六頁及び第六十二頁

第四表 月別前借金額

單位圓

年次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	合計
大正二年	2,220	10,111	10,220	12,210	12,220	10,110	10,220	8,220	8,220	2,220	12,220	12,220	12,220
大正三年	2,220	2,220	10,220	12,210	10,110	10,220	10,220	8,220	2,220	12,220	12,220	12,220	12,220
大正四年	2,220	2,220	10,220	12,210	10,110	10,220	10,220	8,220	2,220	12,220	12,220	12,220	12,220
大正五年	2,220	2,220	10,220	12,210	10,110	10,220	10,220	8,220	2,220	12,220	12,220	12,220	12,220
大正六年	2,220	2,220	10,220	12,210	10,110	10,220	10,220	8,220	2,220	12,220	12,220	12,220	12,220
大正七年	2,220	2,220	10,220	12,210	10,110	10,220	10,220	8,220	2,220	12,220	12,220	12,220	12,220
大正八年	2,220	2,220	10,220	12,210	10,110	10,220	10,220	8,220	2,220	12,220	12,220	12,220	12,220
大正九年	2,220	2,220	10,220	12,210	10,110	10,220	10,220	8,220	2,220	12,220	12,220	12,220	12,220
大正十年	2,220	2,220	10,220	12,210	10,110	10,220	10,220	8,220	2,220	12,220	12,220	12,220	12,220
合計	2,220	2,220	10,220	12,210	10,110	10,220	10,220	8,220	2,220	12,220	12,220	12,220	12,220
平均	2,220	2,220	10,220	12,210	10,110	10,220	10,220	8,220	2,220	12,220	12,220	12,220	12,220

備考 △は最低 ○は最高

右の表に就いて大正二年より大正十年に至る九ヶ年間に於ける月別前借金高の最低額を見るに、大正二年の八月に於ける八、六〇〇圓、大正七年の九月に於ける五、九〇〇圓、大正九年の七月に於ける一九、五五〇圓等の例外はあるが、其の他は何れも一月が最も低い。九ヶ年間の平均も同様である。一月から毎月次第に増加して四月が一つの山をなしてゐる。十二月が各年を通じて例外なく其の最高額を示してゐる。これ等は月別前借件数の場合に於けると殆んど全く同一の現象と言つてよい。そこで月別前借金高の季節的變動は月別前借件数の季節的變動と同一の経路にあると言ふ事が出来るから、私が前述の説明を繰り返す徒勞を敢てしないで、凡ての關係は明瞭であらう。

〔口〕公娼前借金と一般物價

公娼の前借金はある意味に於て商品價額と看做す事が出来る。そこでこれが一般物價と如何なる關係にあるかを研究し度いのである。一般物價の騰落に對應して、しかもこれが比例的に上下してゐるものであるか、或は、物價に對して各種の價額が極めて不規則な對照しかしい例に乏しくなかつたが、³¹⁾この場合に於てもそれが非常に不規則なものであるか、若し然りとするも、斯くの如き現象に對してもそれ相應の説明が求められないか、と言ふやうな問題を問題とし度いのである。

そこで私は先づ月別による一ヶ年間の前借金高を調査したのである。第五表は即ちそれである。

第五表 一ヶ年間の前借金額

單位圓

年次	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	平均
大正二年	二四	一四〇	一五五	三三	一四	三三	一四	一〇五	一〇五	一一	一一	一〇五	二六
大正三年	一四〇	一	一四	一一	一四	一六	一四〇	一四	一四	一六	一四	一一	一一
大正四年	一四	一四	一〇五	一一	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
大正五年	一〇五	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
大正六年	一一	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
大正七年	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
大正八年	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
大正九年	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
大正十年	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四

説 明 公娼の前借金に就て

第十七卷 (第一號 一〇二) 一〇一

右の表に就いて見るに、前借金高は同年内に於ては月を逐うて増大しつゝあるやうな傾向はなく、また大正二年より大正十年に至る九ヶ年間に亘つて前借金高を月別に觀察しても、そこには何等季節的變動が發見されさうもない。言はゞ月別前借金高の大小は月の前後に於て不定である許りでなく、月の縦横に於ても亂脈である。即ち一定の傾向はどこにも發見する事が出来ないものである。そこで私は十二ヶ月の平均前借金高を各年に亘つて算出して見た。するとこゝで初めて一つの傾向を見出す事が出來た。それは平均前借金高は逐年増加しつゝあると言ふ事である。大正四年は大正三年よりも多少低いと言ふ例外はないではないけれど。

前借金高と物價との關係を研究するに當つて、月別統計は到底利用す可からざる事を知つたから、そこで私は之に年別統計を採用する事とした。左の第六表は年別による前借金高と其の指數及び日本銀行物價新指數とを現はしたものである。

第六表 前借金額指數及び日銀物價新指數

年次	種別	前借金額	指數	日銀物價新指數
大正二年		118	100	100
大正三年		113	100	95
大正四年		117	101	98
大正五年		113	100	117
大正六年		116	118	124
大正七年		116	125	123

大正八年	二三	一八四	三六
大正九年	二六九	二四九	三六〇
大正十年	三三〇	三三六	三〇一

日本銀行物價新指數は大正二年を一〇〇とすれば、大正三年及び大正四年は少しく降下し、以後逐年騰貴してゐる。大正十年に及んで、前年に比較して二割五分方も下落してゐる。言はゞ物價は大正三、四年及び大正十年の不況時期に下落して、大正八、九年の好況時代に最も暴騰してゐる。次に前借金指數を見るに、大正二年の一〇〇に對して逐年上騰してゐる。只大正四年は大正二年より僅か許り下落してゐるが、それでも大正二年よりは高く、大正十年も大正九年より騰貴してゐる。そこで双方の指數を比較對照するに、物價は不景氣の場合には必らず下落して、好景氣の場合に騰貴すると言ふ極めて世間的の現象を呈してゐるに反して、前借金即ち公娼に對する商品價額に在つては、經濟界の好凶に關係なく常に騰貴しつゝある。

商品殊に便利品は必要に應じて其の需要を節減する事が比較的に容易である。しかし性慾は食慾と同様一定である。必要程度以下に節減する事は不可能である（最近の傾向から言へば好景氣の場合には一般に婚姻率が増加して、¹⁴⁾性慾が正當に満足せられる機會もそれ丈増加する。しからは、この場合に於て、公娼の需要は減退す可き筈だと考へられるが、事實は之と全く反對に矢張り増加しつゝあるのは、婚姻可能年齢に達し乍ら、經濟上婚姻し得ない獨身者は依然として存在してゐるし、一方には金廻りのいゝために、この方面に於ける放縱生活が頻繁になる傾向があるため

14) Bowley, Elements of Statistics. p. 156
 Rümelin, Bevölkerungsslehre, (Schönbergs Handbuch d. P. Ö) S. 899.
 Ogle, On Marriage-Rates and marriage-Ages. (Journal of the Royal Statistical Society. 1890. p. 262)

であらう。不景氣に際して、婚姻率が減少し、それ丈公娼の需要が増加する事は見易い所である。斯くの如き結果は、吾々の經濟組織が性的存在としての人間を無視してゐる爲めに他ならない。洵に痛々しい事實には違ひないけれども、公娼と言ふものが需要も供給も吾々の社會には必然的にこびりついてゐる。これを供給する者は元より氣の毒である。これを需要する者も同様に不幸である。彼等を指して罪人呼ばはりする事は社會に餘り慈悲がなさ過ぎる。何ぞ知らん、彼等をさうした境に突き入れるものは社會そのものの力に外ならないからである。

(八) 新公娼と再度或は鞍替公娼との前借金高

公娼の前借金高は新公娼と再度或は鞍替公娼との間には常に差額が存在してゐる。左の第七表は両者の一ケ年間に於ける前借金高を調査したものである。

第七表 一ケ年間の前借金額

	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年	大正七年	大正八年	大正九年	大正十年	平均
最初のもの	六五	一〇二	四二	一一三	一一三	一六五	一八五	三三九	三六三	一五三
再度のもの	一五	一四〇	一五	一三九	一四一	二〇一	二四三	三六八	三六八	一〇三
比率	〇・七二	〇・七三	〇・七二	〇・八七	〇・〇・〇	〇・六八	〇・七五	〇・五九	〇・七九	〇・六八

新公娼の一ケ年間の前借金額は大正二年には九六圓であつて、大正五年には増加して一一二圓に達し、大正八年迄は百圓代に在つたが、大正九年には二四九圓達し、大正十年には二八二圓に上つた。九ケ年間の平均額は一五三圓である。次に再度或は鞍替公娼の一ケ年間の前借金額を見

るに、大正二年には一三五圓であつて、大正七年には既に二百圓代に達し、大正九年には三百圓代を越えて、大正十年には三五八圓に上つた。九ヶ年間に平均額は二〇二圓である。

兩者を比較對照するに、其の平均額に於ても知らるゝ如く、新公娼の前借金額は再度或は較替公娼の前借金額よりも常に、そして必らず低いのである。これは新公娼は舊公娼に比較して各種の疾病に冒される割合が非常に高いので、抱主が之を恐れるのと、もう一つは「これの方が主要な理由であるが」「假設にも誠實の心ある可からず」云々と言ふ世にも奇態な、色街でなければ見られない標語に馴らされてゐないために、従つて、遊客をたぶらかす術に拙なく、一般には稼高が少ないためである。換言すれば肉體的にも營業的にも、公娼としての訓練が未熟であるがためである。

附言 材料蒐集に際して、京都市松原署の示されたる厚意を深謝す。